詠む広場

毎日俳壇

西村　和子　選

軍配を返せば止まる団扇かな
国分寺市　野々村澄夫

△評▽大相撲夏場所の取り組みが始まる一瞬を、見事に切り取って描写した。緊迫感が伝わってくる季語の使い方が絶妙。

罫線をはみ出す漢字花は葉に
前橋市　松本　潤

△評▽漢字を習い始めたばかりの小学生のノート。励ましたくなる。季語が時の経過を表す。

航跡の大きく曲がる立夏かな
相模原市　はやし　央

八十八夜農事日誌を怠らず
有田市　谷中　節子

新緑の勢ひ借りて完走す
加須市　野口　勇一

陽のひかり底まで届く芹の水
つくば市　有阪　貴男

涼風やみな覗き見る乳母車
鹿嶋市　津田　正義

どこまでも植田眩しき水の郷
枚方市　門川　清秀

山藤や柳生に今も武道場
奈良市　上田　秋霜

しっかりと絞る雑巾柿若葉
平塚市　高橋　佳代

井上　康明　選

八ケ岳その峰々に夏来たる
川崎市　久保田秀司

△評▽険しくそびえる八つの峰、そのそれぞれにみずみずしい夏がやって来る。登山の季節の到来、荒々しい山肌が見えるようだ。

青き森の息に染まらむ延齢草
相模原市　小山　鞠子

△評▽エンレイソウは初夏、山間の湿地に咲く花。青い森の息に染まるだろうとの比喩が生きている。

御用邸涼風とめどなかりけり
富士市　後藤　秋邑

みづうみの向うは比叡風薫る
岸和田市　妙中　正

とことはに帰るたましひ南風
川越市　峰尾　雅彦

倒木に水の匂ひや桜桃忌
京田辺市　加藤　草児

十薬の花を摘みたる老夫婦
相模原市　はやし　央

夢に会ふ日もなきままに合歓ひらく
直方市　岩野　伸子

松蟬や磨き抜かれし弓道場
東京　山口　照男

放哉の墓へ近づく遍路鈴
高松市　島田　章平

片山由美子　選

ダムはほぼ水満たしをりほととぎす
北九州市　宮上　博文

△評▽満々とではない「ほぼ」が効果的。俳句はこういう一語がものをいう。ホトトギスの声が水面に響いているにちがいない。

博多弁とび交ふ中洲走り梅雨
春日市　林田　久子

△評▽博多の歓楽街として知られる中洲。独特の語尾の言葉が雨音と共に勢いを増すかのよう。

閉店の文字の小さし春灯
東京　郡司　正男

早苗饗やおかへりと言ふ母がゐて
伊丹市　高科惠知子

薔薇の雨妻の残せる鍵の束
いわき市　会沢　繁

噴水は待ち人ばかり午後六時
土浦市　今泉　準一

大皿にけふの釣果の桜鯛
町田市　枝澤　聖文

卯の花や定時に来たる送迎車
奈良市　伊東　勝

風に乗るアルプホルンや開山祭
東京　徳原　伸吉

熊蜂の羽音勇まし藤の花
見附市　岡村　文子

小川　軽舟　選

旧道の郵便局に燕来る
東京　土方けんじ

△評▽町のにぎわいはバイパスとロードサイド店に移った。郵便局は昔のままの旧道を離れず、今年もツバメを迎えた。

父の居ぬ父の日父の辞書めくり
御殿場市　廣岡　綾子

△評▽父の愛用したものを手にしてみる。それが作者の「父の日」の過ごし方なのだろう。

夏立つや雨の切つ先沼を打つ
川越市　大野宥之介

べた凪の小波のゆらぎ今朝の夏
鳥取　馬野慎一郎

風光る渡船通学慣れ始む
新居浜市　寺村　洋子

街の色ぱっと明るく更衣
岡崎市　加藤　幸男

ぶらんこの中学生が蹴る大空
座間市　高橋　貴子

和蘭石竹カレーの腐るこの家に
東京　山崎　なお

風鈴の音に筆進む辞表かな
姶良市　井之川健児

時計見てまた眠るなり昼寝覚
守山市　中井寿賀子

うたは奏でる

夢の歌

染野太朗

・ただ一度ひらきし夢の抽斗にしまはれてゐた氷製の櫛　金田光世

最近読んだ歌のなかでやけに印象に残っているのが右の歌。夢の中の抽斗。それがたった一度だけひらく。そこには氷でできた櫛が収められていた。この「ただ一度」という状況を正確に読み取るのは難しいが、あるいはこの人の夢には頻繁に同じ抽斗が登場するのかもしれない。抽斗や櫛が、深みをたたえた心理的な何かを象徴しているようで、しかし同時に、象徴性などまるでない、ただそこにある無機的な物体としても感じられる。舞台が夢だからこそその両義性に私は魅力を感じているのだと思う。

この歌人に限らず、印象的な夢の歌はほかにももちろん多くある。

・夢に来し木馬やさしくわれを嘗め木馬になれとはつひに言はざり　山田富士郎

さまざまな解釈が可能だと思うが、私はこの歌を他者との断絶や孤独の表現として読んでいる。自由に木馬にもなれるはずの夢の中でさえ、この木馬は「われ」を仲間として迎え入れようとしない。木馬にとってそれはやさしさなのかもしれないが、「つひに」というひと言には異種としての隔たりに対する「われ」の悔しさや諦念を読んでもよいように思う。

・のしかかる腕がつぎつぎ現れて永遠に馬跳びの馬でいる夢　飯田有子

夢だからこそ永遠ということがリアルに感じられるのだと思う。現実世界においてそれはほとんど比喩でしかない。抑圧による苦しさとそのむごさ、そしてわずかに見て取れるユーモアが恐ろしい。

（そめの・たろう＝歌人）